

『異怪と境界―形態・象徴・文化―』

小池 淳一

二 取り上げられた説話と視点・方法（一）
—文献資料篇の要約—

一 はじめに

本書は著者の学位論文の公刊である。内容はこれまでの著者の説話研究の蓄積が集約されており、一種の著作集の趣を持つ。上下二冊にまとめられているが、極めて

（一九九二年、溪水社）、『ハリマオ マレーの虎、六十年後の真実』（二〇〇二年、大修館書店）といった話題を呼んだ著作があるものの、学術論文集としての体裁をとった著作は本書が最初にして最後のものとなつてしまった。

数多くの説話を取り上げられ、分析され、吟味されており、その視点は副題にある通り、形態・象徴・文化にまたがるものとなっている。二〇世紀後半の説話や文化に関する構造や象徴分析の視点と方法とを縦横に使いこなした研究といえることができる。そうした点で本書は注目に値するのだが、それほどばかりではなく、著者が二〇一一年四月に逝去されたために遺著となつてしまった、という側面も持つ。著者には『神話の森』（一九八九年、大修館書店）、『伝承の宇宙』

ここでは上下二冊の内容をその論点と分析方法、成果に注意しながら要約紹介し、さらに評者なりの読解に基づき、本書の達成とその上に展開される可能性について述べてみたい。なお、いささか煩瑣になることをおそれながら、読解の根拠となる箇所をの頁数をなるべく提示しながら書評を進めていきたい。評者の読みが多くの読者によつて相対化もしくは批判されることをも期待しての措置であることを冒頭で述べておく。

上巻の序章において著者は本書の主題を次のように述べている。「人界・他界の接点に生起するさまざまな異怪の伝えに関連して、日本人が抱き来った神話的宇宙観・世界観を問う」（一頁）とし、日本人にとつての宇宙は円環的重層的であると、神話的時空において神話とその構成要素は永遠の回帰と再生とを繰り返しているものだと把握する（二二―三頁）。そうしたものの具体例として境界における身体の欠損、モチーフの隠喩や連鎖、さまざまな境界の象徴が挙げられていく。さらにそれらは自然や文化の条件によつて同化する。具体的には水神や客人神などにも表出し、さらにモチーフの解読によつてそれらを作り上げ、管理した者たちを見通そうとする。つまり伝承の「シナリオ・モチーフ・要素などの形態・類型の比較を通じて、それらに通底する神話的境界観念を抽出し、またその風土化の様態を検証し、さらに伝承の生成・管理者の実態を推理しよ

うとする」(二三頁)というのが本書を貫く姿勢といえることができる。

まず、第一篇文献資料篇では十三章にわたって説話の分析が行われる。

第一章「道命と和泉式部の伝承―両者の交会と下品の神の出現をめぐって―」では『宇治拾遺物語』や『古事談』などに記録された道命と和泉式部との会合、法華経読誦に伴う下品の神の出現を語る説話の分析が行われる。道命阿闍梨と和泉式部の両者の伝承世界における性格を確認し、「神祇の法華経聴聞」および「僧侶の女犯と法華経」というモチーフを析出し伝承の構成を確認する。さらに五条という舞台を指標に下品の神とされる道祖神、疫神の性格をふまえて、この説話を天台浄土教系の聖と遊女との交渉に関する説話の一環とし、上述の二つのモチーフの結合に五条道祖神の神秘的な性質が関わりとする(五七頁)。

第二章「源光の伝承―偽仏の看破をめぐって―」では『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』に記録された柿の木の上に出現した仏を源光が天狗と見破る説話を取り上げる。

伝承の構造として他界から出現する魔と勇者との闘争を見だし、さらに光にまつわるさまざまな伝承の背景に菅原道真との確執が投影されている可能性を指摘する。そして五条西洞院という伝承の舞台が自他両界の接点でもあることを述べる(一〇〇頁)。

第三章「永超の伝承―魚食と疫神の出現をめぐって―」では『古事談』、『宇治拾遺物語』、『雑談集』、『三国伝記』に記されている魚食を常とする永超僧都に魚を奉つていた者が疫神から免れるという説話の分析が行われる。この説話は「旅僧の疫弊と在家による献貢」と「死者を拉致する者と三宝による退去」というモチーフの連鎖の接合であり、興福寺系の聖によつて形成され、伝播したのではないかと論じる(一四三―四頁)。

第四章「智海の伝承―病者との法談をめぐって―」では『古事談』、『宇治拾遺物語』に記される高僧が病者との法談を交わすというタイプの説話を検討している。病者がしばしば仏菩薩の化身であったとされること、説話の舞台が橋や坂と推定され、そこは聖の活動の場であることが指摘される。

そしてこの説話は「法文諷誦による賢者の陰徳露見」と「仏菩薩の病者・乞食の態による化現、高僧との法談」という相似したモチーフが聖によつて布施や講会の場で語られたか、と論じる(一六八頁)。

第五章「禪珍内供の伝承―異形の鼻をめぐって―」では『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』に収められている有名な鼻の長い僧をめぐる説話を個々のモチーフの原初的な意味に注目して、分析している(二七五頁)。

煙・虫を出す鼻は体内地獄の表象であり(二八〇頁)、童子面罵は悪因悪果を教宣するものかとする(二八二頁)。さらに内供の鼻が治癒と病とを繰り返すのは「抜苦」の思想の反映であろうとする(二八四頁)。

またこの説話が『今昔物語集』の巻二八に収められているのは、口承伝承として流布していたという片寄正義の推論に加え、機知の問答、言葉戦いによる演劇的な要素もあることを芸能史の成果を援用して指摘する(一九三―四頁)。結論として「口業による高僧の罹病と病の永遠回帰」「治療による高僧の受苦の解消」を併せた第一段

に「高僧と童子との問答と童子の勝利」の第二段が「宗教的優位者の敗北と劣位者の勝利」という観念によって連結し、その底流には「高僧に対する民間仏教者の優越」という思想があるとする（一九五頁）。

第六章「真髮成村の伝承―小男の学生との闘争をめぐって―」では『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』における相撲人が小男に敗れるという説話を分析している。ここでは相撲節に注目し、水神との交渉を看取する（二〇九頁）とともに、大学寮と隣り合っていた神泉苑や朱雀門が異界もしくは結界であることを指摘する（二二三―二五頁）。

また境界における身体の欠損や分離が、他界との往還を象徴することを類例を挙げ、論じている点（二一五―二七頁）は重要である。そしてこの説話に水神信仰とその祭祀の記憶を読み取り、大力がしばしば神からの賜であり、その保持者が神もしくは神に近い存在とされたこと、それゆえに、この伝承を担うものにとって武勇の証、名譽ともなったことを述べる（二一九―二〇頁）。

第七章「菅原道真の伝承―魔軍の空中飛

翔をめぐって―」では『道賢上人冥途記』、『日藏夢記』、『北野天神根本縁起絵巻』、『扶桑略記』等にある菅原道真の説話において、

道真に率いられた一六万八〇〇と数えられる魔軍を神仏習合の申し子とし（二三〇頁）、虚空を飛ぶ道真の怨霊の内性を古代神話の雷神に観音信仰の変化としての大自在天が重ね合わされているとする（二三八頁）。第八章「久米仙の伝承―女人との邂逅をめぐって―」では『扶桑略記』から『今昔物語集』、『本朝高僧伝』などを経て『大和名所図会』に至る久米仙が女体に恋着して通力を失う説話を検討して、『菩薩処胎経』に基づくものと確認し、それが風土化したものとする（二六二頁）。そしてその後には水神の来臨を待つ神妻のイメージ（二五八―九頁）、伝承には聖の関与があったと注意する（二六三頁）。

第九章「鯉と鰐との伝承―琵琶湖の覇権闘争をめぐって―」では『今昔物語集』巻第三一の鯉と鰐とが竹生嶋をめぐって争う説話について『竹生嶋縁起』等の類話を参照しながらモチーフと要素の検討を行い、

湖中他界と海中他界との闘争を表意したものとする（二七九頁）。

第十章「俵藤太秀郷の伝承―琵琶湖の龍宮入りをめぐって―」では琵琶湖の龍神に請われて神敵の百足を射殺した秀郷の説話を『太平記』をはじめとする、お伽草子、謡曲、軍記、地誌類に探る。特に龍宮の神宝との関わりなどに着目して、この伝承に鍛冶職・鑄物師の関与があったと推察している（二九二頁）。

第十一章「白井の君の伝承―井中の龍宮をめぐって―」では『今昔物語集』巻二七における白井の君という僧侶が井戸の中に金属器を失う説話を取り上げる。ここではこうした説話を支える俗信を類似のモチーフを持つ伝説・説話を博搜して論じ、「宝物の水界帰還」と「水神に仕える女」という二つの神話観念を基底にしつつ文芸化されたものとする（三二二頁）。

第十二章「三條東洞院鬼殿の伝承―雷神による武人蹴殺と怨霊の生成とをめぐって―」では『大鏡』などで知られる三條東洞

院鬼殿に住み着いた藤原朝成の怨霊を意識しつつ、『今昔物語集』巻二七における雷に蹴殺された男の死と怨霊の誕生にまつわる説話を取り上げ、その始原的意味の解説を試みる。雷神による蹴殺、馬をつなく松、落馬のモチーフを抽出し、乗馬で境界を越える者が心身の欠損・毀損を受け、馬ともども地縛霊と化する神話観念を読み取り、説話形成の過程で、水神が馬を好むという俗信を指摘する(三三三～三四頁)。

第十三章「道公の伝承—沙門による道祖神の救済をめぐる—」は『大日本法華驗記』、『今昔物語集』巻一三における道公による道祖神の救済と補陀落渡海をめぐる説話に法華経による救済と舟送りによる救済との二重構造が存することを指摘し、こうした合成がなせ行われたのかについての考察に取り組み。伝承のモチーフをいくつかの説話や民俗事例と比較検討し、舟送りによる補陀落渡海は付加的なもので現実の補陀落渡海の反映であるとする(三五七頁)。さらにこの説話は四天王寺の説教聖によって形成され、伝えられ、管理されてきた蓋

然性が極めて高いとする(三五八頁)。

以上、上巻の文献資料篇では説話文学資料を博搜し、さらに民俗事例やその分析成果も参照して、文学テキストの解析にとどまらない文化のレベルの検討が目指されている。仏教をはじめとする宗教的知識の系譜にも周到な目配りがなされ、説話が包含している世界の豊かさが提示されているといえるだろう。

三 取り上げられた説話と視点・方法(二)

—□承資料篇の要約

本書の下巻、第二篇は□承資料篇となっている。文献と□承の両方に広く対象となる資料を求め、分析を進めていることが本書の大きな特色であるが、その視点や方法は対象に即した着実なものである。以下、十章にわたってそれを確認していこう。

第一章「狐のお産」の伝承—愛知県西尾市の事例を中心に—は全国的に分布し、昔話としての話型登録もされている難産で苦しむ狐が人間の医者や産婆に助けを求め、無事出産の後、返礼をするという伝

承の分析である。

まず、全国の伝承例一六四を集成し、モチーフの特徴を整理した後、副題にあるように愛知県西尾市とその周辺における聴取調査を行っている。そのなかで実在した浅井醫医師と結びつくことを見だし、その実績をたどっている。さらアンケート(紙上)調査も実施して伝承の変遷について論じている。この伝承が西尾市とその周辺で世間話としての活力、伝播力を獲得していた経緯が詳細に跡づけられる(七三頁)。

第二章「消えた新妻」の伝承—パリの事例を中心に—は外国などの見知らぬ環境の店舗などで、若い日本人女性が人目につかぬコーナーに入った後、消えてしまい、人身売買の罠にかかってしまう、もしくは危ういところを助かる、という噂話を取り上げている。ここではパリにおける対面調査と日本における高校生、大学生を対象とした紙上調査に基づくデータを組上に載せている。そして消える場所—例えば、パリ—が現代都市の典型であること、発見される場所が曖昧な辺境で他界の象徴と解されるとする

(八三頁)。重要な先行研究として、E・モ

ランの「オルレアン」の分析結果とも比較しつつ、「消えた新妻」の噂話は「都市の現代化」と「日本人の行動範囲の拡張に伴う異界との境界線の曖昧化」という状況の中で「女性の他界との接触。実態不明の者による拉致。心身の変質。死あるいは不帰」という神話の原型が活性化と増殖の場所を見いだした結果だとする(一〇二頁)。

さらに近年の調査結果をふまえ、この噂は性差や年齢等による狭い集団社会を超え、無制限に拡散する傾向にあるとし、テレビやインターネット等の瞬時に世界に拡散する情報媒体に伝播の一斑を依拠しているとも指摘している(一〇三―四頁)。

第三章第五章は「石像の血」の伝承」と題して、神仏像の顔に朱や丹等を塗ったことがもとで島が沈んだり、海嘯が起きたりするという口碑を取り上げる。第三章は「九州各地の事例を中心に」という副題のもと、長崎県五島列島西方とされる高麗島(または蓬萊島)、鹿児島薩摩郡下甌村、川辺郡笠沙町の彼方とされる万里が島の事例を

取り上げる。

このパターンのモチーフは古く漢土にあるものの、それらは都城の陥没を語るのに対してわが国のは島嶼や港湾の陥没伝説であること、またその地からもたらされたという陶器の伝来が伝承を補強する点を实地調査の成果を提示しながら確認し、一元的な解釈は難しいとしながらも「兄妹始祖」「椀貸淵」といった神話観念との類似を指摘している(一二七―八頁)。

次いで第四章では「静岡県浜名郡新居町今切の事例をめぐって」という副題のもと、同地の山中から出現した法螺貝が海中に回帰したことによって地域が陥没したという伝承を紹介し、さらに「石像の血」型の亜型の伝承も存在することを指摘している。そして史料に基づき、この伝承の定着には自然災害による一帯の水没という歴史的事実の記憶が原因と推測している(一二二頁)。

さらに第五章では「青森県東津軽郡今別町の事例をめぐって」という副題で、同町大川平における伝承を取り上げている。この事例の最初の紹介者である佐々木達司氏

の導きにより、現地調査を行った結果として、世間話が定着する過程の所産として認識すべきか、としている(二六一頁)。なお、比較的多数の伝承事例を扱ってきたこれまでの論述に対して、ここでの孤例を扱う姿勢はいささか特異なもののように思われる。

本州北辺にまで及んだ海嘯伝承の検討は、一転して南島に向かう。第六章「人魚と海嘯の伝承―沖縄県宮古島の事例をめぐって―」は、沖縄宮古島一帯に伝承されてきたヨナタマという物言う魚を捕獲したことで起きた海嘯の伝説、すなわち「海霊受難」型について著者自身の調査成果も加えて検討する。

宮古さらに八重山の類似の伝承を例示した後、本土にもかつてよく似た伝承が存在した可能性を指摘し(一二二―五頁)、さらに人語を話す水霊、片身の魚の蘇生、海嘯の予言といったモチーフごとに類似の伝承を挙げる(一七五―九頁)。そして第五章までに検討した「石像の血」との関連は基底にある神話観念「境界における水霊への冒瀆の罪」であり、古層において共通性があ

るとする(一八〇頁)。

第七章―第八章では「月の中の一木足の
人」と題して鬼に追われた姉妹が樹上に逃
れ、月や太陽に向かって綱の降下を願ひ、
それによって天空の世界へ逃走するという
説話、すなわち日本の昔話では「天道さん
金の綱」にあたる説話の分析が行われる。
第七章では「他民族伝承との関連その他」
という副題で鹿児島県沖永良部島における
著者自身のフィールドワークの成果をもと
にまずアジアにおける類話の検討、さらに
アフリカやオーストラリア、アメリカに比
較の目を広げていく。そのなかで片足立ち
に着目し、この神話が「越境時における片
足の欠損」というモチーフにつながること
を指摘する(二〇九頁)。その上で再び沖永
良部島の事例に戻り、月の満ちと女とを不
死の象徴とする観念が東南アジアの農耕社
会に存在すること、越境する存在の不具は
境界への関与の聖痕であることを確認して
いく(二一四頁)。またこのタイプの説話が
特にサトイモ、ヤマイモなどの根菜文化と
結びついていることにも注意を促している。

第八章では同じタイトルに「鹿児島県沖
永良部島の伝承を中心に」と副題され、農
耕文化との関わりについて詳細に検討す
る。特にインド洋のカーニバル諸島の
伝承との比較を通してイモ文化との深い関
連が確認され(二六六―七頁)、沖縄島嶼の
アカナーとウナー(鬼)との対決の伝承を
取りあげ、そこに永遠の生命を象徴する水
を汲むモチーフを確認し、北米大陸、ユー
ラシア大陸北辺に分布する伝承との類似を
指摘する。それによって、「天道さん金の綱」

に見いだせる片足欠損のモチーフと生命の
水のモチーフとが沖繩で邂逅、交錯、混交
したと推論している(二八〇頁)。

第九章「月へ上る獵人と犬―他民族伝承
との関連その他」では天人である女房を
追って夫である獵人が犬を伴って天に登る
という説話を取りあげる。これを世界各地
の事例とそのモチーフを参照しながら分析
し、日本には月への女性の逃亡の伝承と月
の斑紋を鬼の母から逃れた娘たちの姿とす
る伝承という異なる伝承が流れ込んでいる
とする(三一―一頁)。

第十章も天人女房譚の類話の分析で「天
空の井戸、天空の柿―高知県宿毛市沖ノ島
の事例を中心に―」と題して、この説話に
おける井戸と柿がいずれも境界標としての
象徴性を有していることを述べ、南方起源
を示唆する(三二九頁)。第九章、第十章は
ともに第七章で扱われた月の世界との交渉
をモチーフとする説話の分析を進めたもの
であり、さらにその類話を日本以外の世界
各地に探求し、諸民族の伝承との比較の上
に検討を行っている。

以上、下巻の口承資料篇では「狐のお産」
「消えた新妻」「石像の血」「天道さん金の
綱」といった四つの伝承の位相が異なる説
話を軸として比較検討を進めることでその
特徴を抽出しようとしている。基盤となる
フィールドワークにおける資料の収集と吟
味、言語の差を乗り越えて基層にある文化
の系統や伝承される社会への視点など、ひ
とつひとつの説話の様相に即した具体的な
作業が行われているといえよう。比較説話
の立場からの模範的な研究の精華が提示さ
れているのである。

四 本書の達成点

少なからぬ紙数を費やして本書の内容を紹介し、その論点を確認してきた。とはいえ、浩瀚な本書が指し示す内容を十全に摘み出してきたかどうかは甚だ心許ない。是非とも、口承文芸はいうまでもなく、説話文学および比較説話研究に興味を持たれる方々が直接、本書に当たられることを望みたい。ここでは前節までの読解の上に立つて本書の方法、内容両面にわたる達成点についてさらに述べて書評の責を塞ぎたい。

まず、確認すべきなのは、本書が副題にあるような形態や象徴として比較文化論的な視点に貫かれている一方で、極めて着実なフィールドワークに基づく資料を用いて論が進められている点である。特に第二篇における口承資料の分析においては、日本の青森県をはじめとする東北地方から先島、奄美などの南島地方における著者の実地調査による資料の提示と伝承経路の確認とが行われ、周到な民俗調査の上に論が組み立てられていることは高く評価されるべきである。

抽象度の高い象徴分析や比較文化的な考察においても、こうした個々の資料を丁寧に取り扱い、可能な限り伝承地に赴き、また伝承者や伝承が保持されてきた地域社会と向き合うことは重要である。それによって、対象とする説話の解析が深まり、伝承の過程で生じる風土との融合を確認できるからである。このことを著者は方法として声高に述べてはいないが、本書における研究の基本的な姿勢として貫いている。民俗的な説話研究における方法以前の態度として著者が生涯をかけて維持し、継続したものと、称揚しておきたい。

しかもその調査の姿勢は日本の各地域地方にとどまらず、「消えた新妻」の分析に見られるように海外に及び、またその方法としても「狐のお産」の検討などに見られるようにアンケート調査なども駆使する柔軟なものであることに気をつけておきたい。著者にとっての口承資料の調査は画一的なものではなく、可塑性にも富み、多様な方法を積極的に展開するものであった。このことは口承文芸の研究を志す後進に対する大きな叱咤

であり、激励であると受け止めた。

方法として口承文芸研究に訴えるのは著者のこうした姿勢であり態度であるが、研究の成果・内容に即して言うならば、従来の民俗研究の成果とそこからもたらされる視点を咀嚼・活用するという点でも本書は優れた議論を展開している。特にこの点は第一篇の文献資料篇、すなわち説話記録を扱う際にその分析を深いものにして、「真髪成村の伝承」の二〇七頁や「菅原道真の伝承」の二二二頁における雷と蛇との関連や「道公の伝承」の三四二頁における道祖神と疫神との関係は、これまでに民俗学が蓄積してきた視点であり、それらを説話世界に援用し、さらに例証を求めることで、形態および象徴分析のレベルや精度を向上させることに成功している。

なお、「永超の伝承」では説話記録の相互比較から伝承の構造を導き出し、さらに伝承の舞台を古代中世史の成果をも参照してその性格を明らかにしようと試みている。このことは著者の目配りが説話文学研究と民俗研究だけに限られてはいないことをよく示

している。こうした著者の複数の学問領域を果敢に横断し、統合していく姿勢は、説話分析をさらに大きな文化研究へと押し上げるものであることを確認し、本書が照らし出す研究の方向性として高く評価したい。

また著者が序論の一三―一八頁で掲げている境界を越境することで生じる身体の欠損というモチーフについては、第一篇だけでも、三一九、三三三、三四六、三五八頁等々で具体的かつ説得的に確認され、検証が加えられ、さらに個々の変容、表出の姿についても論じられている。こうした全体を貫く視点の確かさ、しなやかさも本書の大きな魅力である。

若干の不満を述べるならば、第一篇の「道命と和泉式部の伝承」「永超の伝承」、第二篇の「狐のお産」の伝承、「消えた新妻」の伝承」といった多彩な方法と果敢な越境に基づく重層的な議論の進め方に対して、他の論考は一つの主題にまとめ得る分析が章を分けて進められているために、問題の所在や対象とする説話や伝承の意義を見失いかねないものとなっていることが指摘できよう。評者は第一篇の第四章から第六章

は説話における身体論として、同じく第七、第八章は説話における飛行のモチーフの分析として、第九章から第十一章は龍宮との交渉の説話研究として、第十二章、第十三章は樹木をめぐる説話の要素を扱うものとして読み取った。あくまでも個々の説話記録を尊重する著者の姿勢とは相容れないものであるかもしれないが、本書で展開されている象徴分析を進めるならばこうした読解も可能であろう。

また第二篇の口承資料については、さらにダイナミックに第一章、第二章は世間話論であり、第三章から第六章は津波を予言するタイプの伝承の分析ととらえることができる。また第七章から第十章での議論は天体をめぐる説話の比較文化的な考察とすることができよう。これらは著者が存命であれば、さらに資料の拡充と分析の深化とを経て単独の著書にまとめられたかもしれない。著者の逝去によってこうした課題は、我々に委ねられたものになった。

五 おわりに

本書は説話が包含する文化的な宇宙の豊

かな広がりをも二十三編の論考を通して具体的に提示した業績である。ここでの知的な越境は、総じて形態論的な分析から比較民俗的な視点へとダイナミックに繰り広げられる。と大まかにいっても、本評で確認してきたように、それは学術的に堅牢なものであり、実地調査や検証は精細である。

つまり換言するならば、口承文芸を基軸とすることで、説話を持つ可能性を見事に抽出することに成功した著作といえよう。その点がわれわれ口承文芸に関心を持ち、思索を積み上げていこうとする者にとっての大きな励ましとなり、目標ともなっている。著者と会話を交わすことは永遠に叶わなくなってしまうが、本書の中に著者が追究し続けた研究上の姿勢や方法、課題はちりばめられている。本書をはじめとする著者の残した研究の数々は、口承文芸研究にとっても大きな導きの灯であり続けることだろう。

（上巻 文献資料篇、下巻 口承資料篇）、
二〇一一年四月 岩田書院刊 八九〇〇円＋
税 A五判 上巻三六二頁、下巻三四五頁

（こいけ・じゅんいち／国立歴史民俗博物館）